

平成30年4月5日発行(毎月5日1回発行)
第58巻4月号(通巻705号)

風土



4

足^{あし}半^{なか}も力抜くかに鵜飼終ふ

(句集『高蘆』より昭和四十三年作)

この句は長良川の鵜飼いを見た時のもので、他に「鵜筆の火を雫る水流れつつ」や「鵜は籠に鵜簀の鋼火の曲げ」などがあります。採りあげた句の註には、「足半は土不踏までの小草鞋、鵜舟にてふんばりに用ふ」とあります。鵜匠が舟の揺れの中で、鵜を操るのにバランスを取り、踏ん張るために欠かせないものです。華やかな祭典のなかで桂郎師は鵜匠の「足半」から目を離さないでいたのです。緊張の解けた鵜匠を「足半も力抜くかに」で言い止めています。俳人の目が捉えた世界です。

豆腐腹もとより知つて団扇かな

(句集『高蘆』より昭和四十三年作)

この句は、豆腐料理屋「笹の雪」で作られたもので、名物料理「涼しあんかけ豆腐」をはじめ豆腐のフルコースを食したのです。さすがに豆腐で水腹になってきました。そこへ女将が伺います。桂郎師、すかさず団扇を煽きながら、「さすがは笹の雪の豆腐だ」と返したのです。「もとより知つて」に、江戸っ子桂郎師のやせ我慢が垣間見られます。

雁 帰 る 両 端 し な ぶ 竹 担 ぎ

(句集『心後』より平成四年作)

冬鳥の中でも雁の帰る姿は、古来哀れ深いものとして和歌などに詠まれてきました。「雁の別れ」ということは
がそれを示しています。また飛んでゆく群れの姿は鉤形とも棹形ともなります。「両端しなぶ竹」はたぶん雁の
群れの飛ぶ姿に重なりますが、人間の世界の春の胎動も伝えていきます。冬の間傷んだ垣の繕いかもしれません。竹
を担いだ人物は帰る雁を惜しみながら、竹を運ぶのにいそしむのです。

一 本 の 棒 に 名 の つ く 苗 の 札

(句集『心後』より平成五年作)

器師は「苗木市」でいろいろと物色して廻るうち、地べたに積まれた棒切れに遭遇しました。近づくと棒の上に
果樹の名前が書かれています。挿木用の枝だったのです。棒ではなかったのだ。この棒は豊かな恵みをもたら
す命を育むのだという驚きが「一本の棒に名のつく」ということばを選ばせました。

湯 気 柱 南 う み を

大歳の暮れかねてゐる堰の水

御降りのあとの日差しを杉しづく

青笹をいつきに駆けて吉書の火

ことごとく湖へ発ちたる火の吉書

生焼けの蜜柑ころがりどんど果つ

田の鴉首かしげをる氷かな

梅探る酒の匂ひの二三人

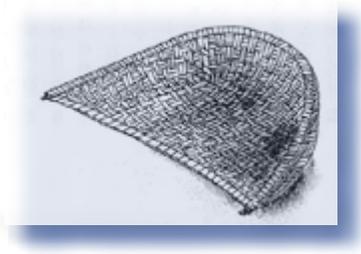
波の秀のあふる水仙刈りにけり

牡蠣打のひよいとうしろに手を焙る

なやらひの庫裡よりどつと湯気柱

追儼の炎真鯉の水にをどりをり

雪片のつぎつぎ走る猫柳



竹間集

同人作品



浄めの雪

林 いづみ

元旦の光の中に師の写真
こころ置く季語別句集去年今年
凜凜と水仙活けしあたりより
お降りの浄めの雪となりにけり
買初めの浅草古地図の包装紙
実南天空近きより日毎減り
ぬすみたき白侘助の垣根かな

初 雀

小林 共代

産神の敷藁突く初雀
露の臺小石ひとつを動かして
初明り白鹿洞に法のかゝ
結界の水仙緑の影まどふ
竹寺の赤き毛氈淑気満つ
去年今年古木の白槇威を放つ
苞に買ふ小町通りの切山淑

初 閻 魔

中根 美保

古帯の金欄ひさぐ年の市
初神楽遠巻きに見て庭師どち
東京の土乾ききり初閻魔
靴跡を担ぎ上げたり霜柱
伯耆より小振りめでたき寒卵
綿雲の一つ据はりて山笑ふ
抽斗に緋の縮緬や雛道具

俳句曼荼羅

間島あきら

十二月八日雨戸静かに閉ぢにけり
枯芝や一語に探すもう一語
身を揉んで風に真向ふ冬の薔薇
初明かり炎色を残す弥生土器
流れ継ぐ水の平か今年かな
師を芯の俳句曼荼羅初御空
祭壇に捧ぐ一書や淑氣満つ

蠟梅

内藤 静

師恩とはかくも明るし冬満月
竜の玉己がひかりをまだ知らず
手水舎の水音さはに寒の入
銅葺に大寒の日のとどまれる
神鶏となる寒林に叫おちびては
枯芝や遠きほどよく日の当り
師の墓へ蠟梅の香のいづくより

早春

宮川みね子

早春の光はじける犬とゆく
春泥の隣家貸家の札をたて
やはらかに結ぶ風呂敷二月かな
うぐひすの声厨窓すこし明け
掌の中で鳴らす鍵束鳥雲に
新聞休刊日春禽の声きらきらす
窓口に貸眼鏡あり日脚のぶ

年迎ふ

土井 三乙

妻と酌む銘柄選び除夜の宿
耳遠となりよ除夜の鐘遠く
年迎ふ身内に昨夜の酔残り
雑煮膳餅いくつかと問はれたる
お元日菓を飲んだこと忘れ
初夢に合ひしは逝ける人ばかり
初硯師に頂きし筆今も

山河集

同人作品



南うみを選

お降りの雪を跳ねたるおかめ笹
鮫鱈のぬかるみのごと置かれあり
火の匂ひ残る焚き口山眠る
糸電話「あのねあのね」と冬籠
一つづつつめゆく座席おでん酒

池田光子

数へ日の文箱に満つる師の言葉
初雪や本屋の奥に犬の席
竹馬と一步の呼吸合はせをり
歌かるた坊主めぐりで締めにけり
七草や濡れて艶持つ犬の鼻
家長とて燭を点せる大晦日
雪降らぬ空のめでたき御慶かな
吾門を出づや一声初鳥

中嶋陽子

森屋慶基

初詣足場の雪を踏み固め
桂郎の酔筆愛づる初座敷

松本胡桃

喰積や父似母似と盛りあがり
福寿草父の一徹もらひ受く
風花や上七軒に灯のともり
鼻声の一人混じりてお年玉
早梅や眼鏡の曇りぬぐひつつ
針のごと東京タワー寒波来る
押し出しとすくひ投げあり雪を掻く
虫眼鏡持つ母の手や日脚伸ば
読み聞かす絵本大判春近し
干拓の村平らかに冬茜

石井美智子

風土独語／南 うみを



桂郎の酔筆愛づる初座敷

森屋 慶基

慶基さんの父、森屋けいじは桂郎、器と二代にわたって親交がありました。その思い出のひとつに「桂郎の酔筆」の句があるのです。正月になるとそれを掛けてなつかしむのです。

初芝居拍手を攫ふ馬の脚

森田 節子

「初芝居」は基本的には歌舞伎をさします。観客も晴着をまとい派手やかな雰囲気の中で、「馬の脚」のパフォーマンスです。やんやの拍手を受けて舞台を引き揚げていきました。

鼻声の一人混じりてお年玉

松本 胡桃

お孫さんへの「お年玉」でしょうか。次々声を挙げる中に鼻声の子が一人います。「風邪大丈夫?」、「うん」としつかり「お年玉」の袋を握りしめるのです。

潮風の浜使ひ切り大根懸く

平田きみこ

この句「浜使ひ切り」と叙することで、砂浜が隠れるほどのたくさんの大根を懸けている景を想像させます。潮風は大根の乾きを早め、旨い漬物になるのです。

押し出しとすくひ投げあり雪を掻く

石井美智子

「押し出し」と「すくひ投げ」で相撲かと思いきや、「雪を掻く」でニヤリとさせられました。除雪の方法なのです。厳しい寒さを笑い飛ばすユーモアがあります。

〈以下略〉

鮫鱈のぬかるみのごと置かれあり

池田 光子

この句は「ぬかるみごと」という大胆な比喻で成功しました。あのだぶだぶとぬめる鮫鱈の皮と「ぬかるみ」を合体させたので。「鮫鱈」の句の比喻では白眉の作品です。

初富士をどうぞと障子開きけり

杉本葉王子

作者は富士山の見える河口湖の近くを終の棲家としました。賀客への一番のもてなしはもちろん富士山です。障子をさつと開けて真白な「初富士」を堪能してもらおうのです。

数へ日の文箱に満つる師の言葉

中嶋 陽子

器師を失ってまだ半年の「数へ日」です。手紙や文書の整理をすると、次から次に師の筆跡が現れ、肉声までも聞こえてきます。その言葉を噛みしめつつ、新たな年を迎えんとしています。

渴筆の墨の涸れゆく淑気かな

落合 絹代

「渴筆」はかすれた感じを出すための書の技法です。いつきに書き終えた墨の香りと乾く早さに「淑気」を覚えるのです。ふと器師の巧みの書を想い起しているのかもしれない。

風土集



南うみを選

初富士をどうぞと障子開きけり 京都

杉本葉子

立て砂に砂零るなし淑気満つ

焚火の火寄れば賑はふ四日かな

散髪を終へし男に冬ざくら

雪こんこん子等とんとと下校かな

渴筆の墨の涸れゆく淑気かな

蒼天に梅檀の実のゆたけしや

江ノ電の海を見てゆく初えびす

大和

落合 絹代

鎌倉栄寿寺

ものこのふの町の福笹ちと質素

八十路にも八十路の未来福寿草

初芝居拍手を攫ふ馬の脚

繭玉の役者番付華やげり

初髪や福良雀のうひうひし

松過ぎの路地に槌音高くあり

川崎

森田 節子

どんど火の爆ぜて空より訝かな

買初は読谷村の皿二枚

新しき皿に盛りたる鯛大根

潮風の浜使ひ切り大根懸く

まなかひに汀女の句碑や野水仙

寒鯉の相寄る淵の日のゆらぎ

煮凝の小骨まさぐる舌の先

悴むや穴をくぐらぬ靴の紐

藁苞は母の面して寒牡丹

太陽のパラボラアンテナ福寿草

初山河器先生今何処

ご機嫌も斜めもありぬ冬木の芽

老いらくの二階と階下日脚伸ぶ

歯切れよき瀬戸の日受けし菜漬かな

貝焼の焦げ目を待ちぬ猪口持ちて

横須賀

平田きみこ

川崎

津川かほる

川崎

井奥れい子